

# 治陰虚勞熱方

## ◆ 資生湯

勞瘵〔勞瘵：肺結核など伝染性のある消耗性疾患，俗に肺病〕で極度に痩せ衰え，飲食が減少し，喘促〔呼吸促迫〕咳嗽し，身熱〔身体の熱感〕して脈が虚数のものを治す。また女性の血枯不月〔無月経〕を治す。

生山薬1両 玄参5銭 白朮3銭 生鶏内金（搗き碎く）2銭  
牛蒡子（炒して搗く）3銭  
熱が甚だしければ生地黄5～6銭を加える。

《易》に「至れるかな坤元，万物資りて生ず」とあるのは，土徳が万物を生じることを用いる。脾胃は土に属し一身の坤であるから，一身を資生できる。脾胃が丈夫であれば，飲食物を十分に消化して自然に全身が丈夫になり，多飲多食で勞瘵を病むものはない。《素問》陰陽別論に「二陽の病は心脾に発し，隠曲を得ざる有り。女子に在っては不月を為す。その伝わりて風消を為し，その伝わりて息責を為すは，死して治せず」とある。病が風消〔風火内鬱し発熱・消瘦する病証〕・息責〔肺の積病〕に至るとは，勞瘵の病になることである。「二陽の病」と名付けるのは，初期は陽明胃腑が飲食を多く受納できず飲食減少が原因になるからにすぎない。「心脾に発す」とあるのは，心脾に原発するからである。「隠曲を得ざる有り」とは何であろうか？ 心は神明の府であり，時として心に隠曲〔人にいえない悩み〕があって，思いどおりにいかな

#### 4 第1章 処方

いと、心神が拂鬱として、心血も脾土を濡潤できなくなり、思いが過ぎて脾を傷る病になる。脾が傷れると、胃を助け消食して精液に化し、五臓を灌漑できない。男子ではその病を隠〔はっきりしない状態〕受けていても表面上無症状であるが、女子では無月経を呈するので明らかになる。すなわち「女のことから男を推定する」である。「伝わりて風消を為す」「伝わりて息賁を為す」は病証がこの段階になると男女ともに症状が現れ、勞瘵になれば挽回は非常に難しいので、「不治」というのである。しかし、医者は人を活かすことを心に期し、危険な病証で挽回し得ない状態でも、誠意を尽くし方法を講じて挽回すべきである。挽回の方法は「二陽の病は心脾に発す」の主旨にのっとるのが妥当である。病者を戒めて淡泊寡欲にさせて心を養い、さらに脾胃を補助して飲食を次第に増加させれば、身体はおのずと回復する。本方では、白朮で脾陽を健やかにし、脾土を健壯にすることにより胃を助け、山薬で胃陰を滋し、胃汁を充足させることにより食を受納する（胃は酸汁により食を化す）。特に脾は統血の臓であり、《内経》には「血は脾に生ず」と記され、脾は血液を形成するので、中に多くの血を函れる。西洋医学でも「脾中には静脈が多く（第2巻補絡補管湯に詳しい）、血が集まる場所である」とする。本証は心思が拂鬱として心血が調暢にならず、脾中の血管の多くが閉塞したり、爛れて火で炙られたようになっていたり、微細な膜を形成したりすることが、脾病の原因である。また、脾胃は相互に扶助し一気貫通しているので、臓が病み腑を助けられないことも、胃が納食できない理由である。鶏内金（鶏の砂袋の内膜）は鶏の脾胃で、中にある磁器片・石・銅・鉄などを消化するので、有形の鬱積をよく化すことがわかる。かつ、薬性が非常に和平で、同時に脾胃で補脾胃する妙があるので、健補脾胃の薬を助けて傑出した奇効をあげ、他薬の到底及ぶところではない。方中の白朮・山薬・鶏内金の3味は欠いてはならない。玄参は《本経》〔神農本草経〕には「微寒」で、「女子産乳余疾」を治すとあり、かつ味は甘が苦に勝るので、寒涼でも脾胃を傷らない。したがって、上焦の浮熱を去って、全身の焼熱を退け、さらに色が黒くて液が多

く、《本經》には「補腎氣」ともあり、勞瘵の陰虚を治すには最適である。牛蒡子は質が滑で気は香で、潤肺するとともに利肺する。山薬・玄参を併用すると、強く止嗽定喘し安肺の効があるので、佐使薬として加える。

地黄は生用すると、涼血退熱の効が玄参より優れる。西洋医学では鉄分を含むといい、血中にも実際に鉄分が含まれる。地黄が退熱に働くのは、涼血滋陰だけでなくじつは鉄で鉄を補う妙があり、血液を充足させるから蒸熱が退く。また勞瘵の熱は、大抵、真陰が虧損して相火が潜蔵しないために生じる。相火は水臓の命門穴から生じる陰中の火で、方書では竜雷の火といい、ちょうど2点間の電気のようなものである。電気  
の性質は鉄を介して伝わりやすく、地黄は鉄を含むので、相火を引いて下行させ本来の宅〔住みか〕に安んじさせる。《本經》では地黄を上品に列しており、まことに良薬である。しかし必ず甚だしい焼熱が生じてはじめて加えるのは、この方はもともと健補脾胃を主としており、地黄は生用しても水火の煎熬をへると汁漿が粘泥となって脾胃によくない恐れがあるからである。熱が甚だしいと脾胃は必ず飲食を欲しなくなるが、地黄で熱を退けると飲食が進むようになって、逆に脾胃を助ける効果を現す。

生山薬は、薬局で売っている乾山薬であるが、火炒の処理をしていないものをいう。しかし、薬局では山薬は必ず炒熟してから売るのが正しいとする俗習がある。ただし、本方に炒熟山薬を用いるとまったくその効果はない（理由は後の一味薯蕷飲に詳しい）。

於朮は、色が黄で気は香であり、浙江の於潜に産する白朮である。色が黄であるから土に属し、気が香であるから醒脾し、脾胃を健補する効果は通常の白朮よりはるかに優れる。現在薬局ではどれも於朮として売  
るが、品質はさまざまで、価格の安いものは必ずしも於潜産とは限らない。しかし、黄色く香気があるものなら、価格が非常に安くても非常に効果があり、重要なのは色味であって産地ではない。さらに廉価であれば貧しいものでも服用できるので、多くの人々が恩恵を受けることになる。

## 6 第1章 処方

西洋医学では胃が食べ物を消化できるのは胃中に酸汁があるからだという。空腹時に食べることを考えると酸汁が自然に胃からつくり出される。憂思過度あるいは惱怒過度であれば、必ず酸汁の生成が減少するかまったくなくなり、胃中に食べ物が積滞して消化できなくなる。この論理と《内経》の「二陽の病は心脾に発す」は、思いすぎれば脾を傷るの主旨で期せずして一致する。

**問い：**《内経》は「脾は思を主る」といい、西洋医学では「思想は脳から発する」という。あなたが「思は心より発する」というのはどういうことなのか？ **答え：**《内経》に「脾は思を主る」とあるのは、脾は自ら思うことができるという意味ではない。脾は土に属し、土は安静を主り、人は安静にすれば深く思うことができるのであり、《大学》にいう「安んじて後よく慮る」<sup>おもんばか</sup>である。西洋医学でいう「思は脳から発する」については、《内経》に早くもその理が存在し、《素問》脈要精微論には「頭は精明の府」とある。頭を中心点は脳であり頭は精明の府であるから、脳は精明の府である。精明というからには、思うことができないとか、脳が自ら思うことができないという理屈はない。ちなみに古文を見ると、「思」の字は「思<sup>し</sup>」となっていて、「凶<sup>しん</sup>」は脳であり、「心」は心であるので、思の意味がわかる。もともと心と脳は互いに輔け合っており、また必ず脾土の鎮静の力を助けとしているのである。

**問い：**あなたの「二陽の病は心脾に発す」の解釈は、王冰<sup>おうひょう</sup>〔唐代の医家〕の《内経》の注とは違うが、王冰の注解は間違いだといえますか？

**答え：**私はあえてそうだとはいわないが、私の理解で内経の文を解釈すれば、おのずと経文には別の意味があり、かつ実際的であるとわかる。「二陽の病は心脾に発す」は、その後の「三陽病を為せば寒熱を発す、一陽病を発すれば少気し、善く咳し、善く泄す」とは句法が同じではなく、文字づかいを状況に応じて変えている。「二陽の病は心脾に発す」は、その病が心脾よりきたものであることを述べている。「三陽病を為せば寒熱を発す」は、三陽の病状を形容しているので、「之病」の「之」の字を「為」に変えている。「一陽病を発す」の数句は、句法がま

た「三陽病を為す」の句とは違っているが、理由は同じである。

**問い：**三陽病・一陽病はいずれも発病の状態を表現しているが、二陽病だけが発病の原因を追究しているのはなぜか？ **答え：**三陽・一陽では、はじめに発病の状態をいわなければ、何が三陽・一陽の病であるのかわからない。二陽は胃腑で飲食を主ることはだれもが知っており、胃腑が病めば飲食できないこともだれもがわかっている。しかし、飲食ができなくなる理由については多く的人是はわからないので、はじめにその病状をいわずに、まずその病を得た由来を明確にしたのである。

**問い：**胃と大腸はいずれも二陽であり、経文には「二陽」とあるだけなのに、どうしてここでは、専ら胃を指すとわかるのか？ **答え：**胃は足陽明、大腸は手陽明であり、人の足経は長く手経は短くて、足経がもともと手経を統括するので、六経を論じる場合は本来足経を主とすべきである。したがって、《内経》にただ「何々経」とあって手か足かを区別していなければ、すべて足経を指すか、足経を指して手経もその中に統合している。単に手経を指す場合は、必ず「手何々経」と述べている。経文があれば手に取って細かく閲覧するといいい。

民国2年〔1913年〕に名士の家に客居していて、1年以上勞瘵を患って月経が止まり、痩せて衰えきった未婚女性を治療した。私に処方を尋ねるので本方を創製し、数剤を続けると食欲が増加した。身体がまだ熱っぽいので生地黄5錢を加えると、5～6剤服用後に熱が徐々に退いて起床できるようになったが、下肢が痛んで動けない。そこで丹参・当帰各3錢を加えて10剤服用させると、下肢が治癒して月経も始まった。「非常にひどい白帯があることを、これまでいい忘れていた」と言うので、丹参を去って生牡蛎6錢を加え白朮を倍にして10剤続けると、帯証も治癒した。そこでこの処方を郷里の家に郵送したところ、1カ月ほどして門人の高如璧から手紙があり、「隣村の趙芝林が勞瘵を病んで数年治らず、医者にどれほどかかったかわからないが、服薬はすべて無効でした。今年の春に急に咳嗽が生じ異常に喘促し、飲食が減少し、脈が非常に虚数となったので、資生湯を投与したところ10剤で完治しまし

た」とのことであった。このように、この方剤は労瘵に服用すれば男女を問わず素早い効果があることがわかる。

女性の月経が長期間来ない場合は、血海に必ず堅く結した血がある。こうした証の治療には、破血通血の薬ばかりを用いると、往々にして病変が除かれないうちに薬によって傷害を受けてしまう。鶏内金の性は非常に和平で有形の鬱積を除くので、長期に服用すれば堅く結した瘀血は自然に融化する。ましてこの方と健脾滋陰の薬を同時に使用すれば新血が活発に滋長し、新血によりおのずと化瘀できる。

◆ じゅうぜんいくしんとう  
十全育真湯

虚勞で、脈が弦数細微で、肌膚甲錯〔皮膚が乾燥しザラザラした状態〕し、身体が痩せ衰え、飲食しても筋力が丈夫にならず、自汗があつたり、咳逆があつたり、喘促があつたり、あるいは時に寒熱があつたり、夢ばかりみたり、精気が固まらないもの〔遺精や滑精など〕を治す。

野台参 4 銭 生黄耆 4 銭 生山薬 4 銭 知母 4 銭 玄参 4 銭 生竜骨（細かく搗く） 4 銭 生牡蛎（細かく搗く） 4 銭 丹参 2 銭 三稜 1.5 銭 莪朮 1.5 銭

気分が虚が甚だしければ、三稜・莪朮を去り、生鶏内金 3 銭を加える。喘があれば、山薬を倍量とし、牛蒡子 3 銭を加える。汗が多ければ、黄耆を白朮に代え、竜骨・牡蛎を倍量として、山茱萸・生白芍各 6 銭を加える。汗が非常に多く服薬しても止まらない場合は、竜骨・牡蛎・山茱萸各 1 両を煎服すれば、2 剤服し終わらないうちに汗は止まる。汗が止まれば再び原方を服用する。まず体が冷えた後に熱くなって汗が出る場合で、脈がさらに微弱無力なら胸中大気下陥が多いので、治法は私の創製した昇陷湯の後の跋文を詳しくみればわかる。

張仲景には勞瘵の治療として、大黃廔虫丸〔大黃・黃芩・甘草・桃仁・杏仁・芍藥・乾地黄・乾漆・虻虫・水蛭・蟻蝻・廔虫〕があり、百勞丸〔明・呉昆の《医方考》にある。炒当帰・乳香・没薬・人參・虻虫・炙水蛭・熟大黃〕があるが、いずれも破血の薬を多用する。人身の経絡には血が充填されており、内は臟腑に通じ外は全身を灌漑しているので、血がいったん停滞すればすぐに気化が円滑に行われなくなる。これが常に勞瘵の成因である。したがって、勞瘵では肌膚が甲錯し血の気がなくなり、毎日珍味を食し人參・茯苓を服用しても、少しも筋肉を長じ筋力を壮んにすることができない。あるいはいっそうがたがたに痩せ衰え日ごとに悪化するのには、経絡に血が瘀滞し気化を阻塞するからである。玉田〔河北省玉田県〕出身の王清任〔清代の医家。字は勳臣〕は《医林改錯》を著し、活血逐瘀の数種の湯剤を上中下の部位に応じて立案し、瘀血を分消して百病を統治し「瘀血が去れば諸病はおのずと癒える」といった。その論に偏りが無いわけではないが、その主旨には確かに自己の定見があり、その方も効果のあることが多い。そこで私が勞瘵の治療に十全育真湯を創製し、補薬剤中に三稜・莪朮を加えて気血を通活するのは、張仲景の大黃廔虫丸と百勞丸の意を拝借したのである。さらに、仲景は《金匱要略》に虚勞門を列し、特に血痹虚勞の4文字で提綱を示している。これからも虚勞は必ず血痹を生じ、血痹が甚だしければ必ず虚勞になることもわかる。虚勞を治すには必ず先に血痹を治し、血痹を治すことが虚勞を治すゆえんでもある。

**問い：**勞瘵を治すのに破血薬を兼用するのは確かに妥当であるが、破血に三稜・莪朮を用いるのは力が強すぎるのではないか？ **答え：**張仲景が大黃廔虫丸や百勞丸で使用している大黃・乾漆・水蛭のような破血薬は、いずれも三稜・莪朮よりも猛峻であり、彼が方中に三稜・莪朮を用いなかったのは三稜・莪朮が《本經》に収載されていないからである。梁の陶弘景の著作《名医別録》では《本經》よりも365味の薬物を増やしているが、いずれも南北朝以前の名医が用いた薬で、まだ三稜・莪朮の収載はない。したがって、張仲景の時代には三稜・莪朮はなく、あつ

たととしてもまだ経験を積んでいないことがわかる。私が破血薬のうちでも三稜・莪朮を好むのは、破血とともに調気するからである（三稜・莪朮についての詳解は理衝湯にある）。補薬中に三稜・莪朮を佐使として加えると、瘀があれば瘀を徐き、瘀がなくても流通する力によって補薬の滞りを行らすので、補薬の力がますます大になる。まして後天の資生は納穀を宝とし、どんな病気でも服薬後に、飲食が次第に増進するものは治しやすいが、飲食が次第に減少するものは治しにくい。三稜・莪朮と人参・白朮・黄耆を併用すれば大いに開胃進食し、私は何度も試みてしばしば効果を得ている。

**問い：**勞〔勞〕の字には火があり、実際に勞瘵の証は陰虛發熱のものが大半を占める。したがって、錢仲陽〔北宋の医家、錢乙〕の減味八味丸、張景岳〔明代の医家、張介賓〕の左帰飲はこの証に対する良方で、いずれも熟地黄を君として大いに真陰を滋し虚熱を退ける。あなたは方中になぜ熟地黄を用いないのか？ **答え：**熟地黄を用いることについては私も熟練者である。はじめて方書を読んだ当時のことであるが、趙獻可〔明代の医家〕の《医貫》、張景岳の《八陣》、馮兆張〔清代の医家、字は楚瞻〕の《馮氏錦囊秘録》などを読んで、その説が確かであると信じた。臨床では熟地黄を好んで用い、八味地黄丸を湯剤にしたうえで、吸不帰根の喘逆には紫蘇子・白芍を加え、下虚上盛の痰涎には陳皮・白芍を加え、腎不摂気により衝気上逆する脹満には紫蘇子・厚朴を加え（病人がこれを服用すると推蕩〔推し除く〕の力を感じるがあるが、後に創製した參赭鎮気湯のほうがさらに効果がある）、また茯苓・沢瀉を3分の2に減らして女子の消渴・小便頻数を治したり（《金匱要略》では男子消渴の治療に使うが女子にも効果があり、この考えは玉液湯に詳しい）、陰虚で陽を化せず小便が不利して水腫を積成する場合には、附子を去って知母・白芍を加えたりした。また六味地黄丸を湯にして、破れるような頭痛には川芎・知母を加え、非常に強い眩暈には竜胆草・青黛を加え、散大した瞳を収斂するのに五味子・枸杞子・柏子仁を加え、かつ煎汁数碗を勢よく飲むという説を信じた。熟地黄4両・茯



苓1両で下焦不固の滑瀉を止め、熟地黄4両・白芍1両で陰虚による小便不利を通じた。また、かつて1日に熟地黄1斤ばかりを用いて、外感大病の後に忽然と喘逆し脈が散乱して虚脱しそうな危険な証を治した（この証には来復湯を用いるべきであったが、当時まだ創製しておらず、熟地黄を用いることだけは知っていて幸いに成功した。これは馮楚瞻が「熟地黄は腎中の元気を大補する」と述べているのを知っていて試したのである）こともあり内傷だけを治療したのではない。大滋真陰の熟地黄・阿膠で脈が陽浮で陰が応じず汗をつくれない温病を治療し、1日に2剤を連服させ陰を済けて陽に応じさせて自汗を得た（詳しくは寒解湯にある）。この他、一切の傷寒外感で下元が虚憊したために邪が深く内陷する場合は、必ず大量の熟地黄を使うべきで下元を補えば托邪外出できる。ただし陰虚劳熱証の治療では、軽症には有効であるが、脈が7～8至に至る場合は効果がなかった。当時はまだやりかたを変更することを知らず、かつ地黄丸は《金匱要略》の腎気丸で古くから良方と推奨されており、これが効かなければ他の方剤はさらに駄目であると考えていた。ところが、腎気丸には元来は乾地黄すなわち薬局での生地黄を使用しており、桂は桂枝すなわち《神農本草經》の牡桂を用いていて、現在の地黄丸とは大いに異なることを知らずにいた。腎気丸については《金匱要略》に5つの条文があり、「脚気上り少腹に入り不仁す」「虚劳の腰痛、少腹急拘し、小便不利す」「短気し微飲あるは、まさに小便よりこれを去るべし」「男子の消渴、小便反って多く、飲むこと一斗をもって、小便一斗す」「婦人の転胞、胞系を戻し尿溺を得ず」である。以上の5条をみると、もともと多くは少腹膀胱の病変に対する治療で、劳瘵を正治する薬ではなく、まして後世の修製により本来の姿を失っている。後に身熱劳嗽し脈がほぼ8至に至る50歳近い夫人を治療し、まず六味地黄丸加減を湯にしたが効かず、ついで左帰飲加減を用いたがやはり効かなかった。私にはわかに悟るところがあって、生黄耆6銭・知母8銭を処方したところ数剤で軽減し、丹参・当帰各3銭を加えて10剤を続けると全快した。その後は陰虚有熱の証を診て少しでも脈に根があって挽回可能であ

れば、方中に大量の黄耆・知母を用いると必ず効いた。そこで、王叔和おうしゅくわが脈法で「数脈で7～8至に至る場合は不治」としたのは正しくないことがようやくわかった。人は天地の気を稟けて生き、人身の気化はすなわち天地の気化である。天地に将に雨が降ろうとするときは、必ず温暖な陽気が上昇した後、陰雲が集まって大雨が降り始める。温昇補気の黄耆は雨が降るときの上昇の陽気で、寒潤滋陰の知母は雨が降るときに四方から集まる陰雲のようなものである。2薬を併用すれば、「陽が上昇して陰が応じ、雲が行り雨が降る」の妙が大いに具わる。十分に滋潤すれば煩熱はおのずと退くので、これが治さずして治すことである（この理屈は玉液湯の後の跋文で説明している）。まして勞瘵では多くが腎を損なっているので、黄耆で肺気を大補して腎水の源を益し、気を旺んにして自然に水を生じさせ、知母で肺中の津液を大いに滋し、陰陽を偏勝させないようにすれば、肺が調和して生水の効能がますます全面的になる（黄耆・知母を併用すれば虚熱を退けるが、陰虚の熱が甚だしい場合は、必ず生地黄8錢～1両を加えなければ効果がない）。

**問い：**腎気丸は虚勞の専薬ではないが、《金匱要略》の虚勞門では明確に「虚勞腰疼を治す」とあり、虚であれば服用できると思われるが、あなただけがあまり効果はないというのは、古方を尊重しないのか？

**答え：**腎気丸を古方のおりに修正し、地黄は乾地黄を、桂は桂枝を用い、さらに丸剤にして湯剤にせずには的確に用いれば実際に効果がある。なぜなら、生地黄は「血痹を逐う」（《神農本經》）のに、熟地黄にはこの効能はなく、桂枝は營衛を調えるが肉桂にはこの効能はないからである。血痹を逐えば瘀血はおのずと消え、營衛が調えば気血はおのずと調和する。酸温の山茱萸も痹を逐い（《本經》に山茱萸は「寒湿痹を逐う」とある）、辛涼の牡丹皮も破血する。大辛大温の附子は血脈を温通し、地黄の寒涼と互いに助けあって血痹を逐う効果を生じる。腎気丸は補腎薬であるが、じつは同時に瘀血を開く薬であるから、《金匱要略》では虚勞門に列して要方とするのである。丸剤にするだけで湯剤にしないのは、地黄は水火の煎熬を経ると汁漿が粘稠になって薬性が熟地黄に